願いと約束

仁科柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
願いと約束

【Ｎコード】
Ｎ２５１２Ｅ

【作者名】
仁科柚希

【あらすじ】
少女の産まれた家は影に生きる家だった。―殺し屋。それが家業。古くからそれを生業とし続けてきたその家は歪んでいた。皆すべからく殺し屋にならなければいけないから。幼いころから殺しの技を覚えなければならないから。この家に産まれた少女の、少年の、双子の未来と過去とは？只今休載中。再開未定。

第1部　序章　異常な日常の終焉1（前書き）

残酷な描写があります。苦手な方はご注意ください。
少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

第1部　序章　異常な日常の終焉1

いつから狂っていたんだろう少女は思う。
一体いつからー。
目の前に広がる惨劇を見ながら少女は思う。
「大丈夫か？」
と、自分が血まみれになっていても心配してくれる少年を見ながら少女は思う。
あたしのせいで・・・・！
自分が甘かったせいで。
幸せな、叶うことなんてない、夢にしがみついていたせいで。
こんなことに！！
少女は目をつむり、開けた時には覚悟を決めていた。
そして、震えながらでも己の父親に刃を向ける。
この惨劇を作り出した張本人は少女の父だから。
邸内にいた親族は少女と少年を除いて全員殺されていた。
父の手によって。
そして少年もまた殺されようとしている。
どうしても父親に刃を向けられずにいた少女をかばってー。
父親をとるのか少年をとるのかは既に少女の中では決まっている。
一度も笑顔を見せてくれず邸内を血だらけにした父よりも少年をとると決めた。
それに、と自嘲的に少女は思う。父親をとったら自分もここで死ななければいけない。父親に殺されなければならないから。父親をとると言うことはそういうことだから。
でも、殺されることなんてできない。死ぬことなんてできない。
あまりの事に少女は泣きそうになる。でも、ここで泣くわけにはいかない。
泣いたら視界がくもって父親を殺せなくなる。だから、泣かない。

涙がこぼれる前にやってしまおうと少女は刀を持ち直し、一閃。
少女の父親の首が飛んだ。
文字通り宙を飛ぶ。
それはあまりに呆気なくて。
血で紅く染まった刀と服を見て、ああ、と少女は思う。
だんだんと冷たくなっていく少年を抱いて少女は思う。
最初からだ。
最初からずっとずっとずっと。
クルッテタ。
狂ってない時なんてなかった。
普通だった時なんてなかった。
ナカッタ。
「っ、いやだよぉ！いな、いなくなんないでよぉ！」
少女ののどから嗚咽が漏れる。
「泣くな。大丈夫だから。どこにも行かないから」
泣いている少女に少年は言う。
「ほんとぉ？やくそくするぅ？」
「する」
そう言って少年は目を閉じる。体から力が抜けていくのが少女にも分かる。
「やだぁぁぁぁっ！！」
少女は泣き叫ぶ。
でも、少年は目を開けない。
「いかないでぇぇっ！」
逝かないで。
もうこれ以上。
奪っていかないで。
もうこれ以上。
やめて。
何人もの命を奪ってきた自分には思う資格なんてないことを少女

は知っていたけれど。
今も父親を殺したばかりで。
理不尽だと知っていたけれど。
でも、思わずにはいられなかった。
逝かないで。
それは願い。
約束が守られることを願う。
たったひとつの少女の願い。

第1部　序章　異常な日常の終焉2

「ねぇ、このぼろきれみたいになってるのってもしかして羽月(はづき)？」
気が付くと少女の目の前に少年が立っていた。少年の瞳は片眼だけが深緑だった。
少女の腕の中にいる少年―羽月を指さしてそう言った。
「そうだけど。あなたどうしてここにいるの？誰？」
突然のことに驚き、少女は少しだけパニック状態から抜け出した。
「ふーん。じゃ、キミが羽月のオ姫サマか」
少女の問いを無視して少年は続ける。
「この邸内の屍、全部オ姫サマが作ったの？」
「違うわ。父のだけはそうだけど。どうしてここにいるの？」
またもや少女の問いを無視して少年は続ける。
「余裕だね、オ姫サマ。おしゃべりなんかして。羽月もう虫の息だよ。いつまで保つかな？」
少年の言葉に少女は羽月の状態のことを思い出す。
やはりまだ、少女は本調子ではないらしい。普段ならこんなに大切なことを忘れる筈がない。
「ど、どうしよう」
「どうしようって、病院でしょ。こんな傷オ姫サマじゃどうにもできないだろ」
呆れたように少年は言う。一体どこまで錯乱してるんだか。
「だって、こんな怪我普通の病院じゃ診てもらえないもの」
「こういう仕事してるんだから、ヤバめの患者も診てくれるような病院の1つや2つ知ってるでしょ」
「お得意様になってる病院もあるって聞いたことあるけど、どこにあるのかなんて分かんないよ。聞いたことないから」
困ったように少女は言う。
「運営とかに関わってないの？志倉(しくら)家の本家筋なんでしょ、そろ

そろやっとかなきゃヤバイと思うけど」
もっともヤバかったか、と少年は思い直す。この状況では最早過去の話だ。
「ううん。関わってないの。そういうのからは執拗に遠ざけられてて、全然知らない」
「やっぱり禍姫（かひめ）の異名をとるだけはあるね。志倉家でさえオ姫サマを手放すのを嫌がって、外と関わる機会をほとんど無くしたか」
志倉家は影に生き、暗殺を家業とする家だ。この家に産まれたものは学校にも行かずに人殺しの技を磨く。裏の世界でも腕利きぞろいと有名で、海外の大きな組織、政府要人からの仕事の依頼もある。
そんな志倉家では女性のＮｏ．１は禍姫、男性のＮｏ．１は災招（さいしょ）君（うくん）と呼ぶ。
この話は裏の世界では有名で、特に今その地位にいる２人については稀代の暗殺者として名高かった。それは禍姫が１４歳で学校に行っていれば中３、災招君が１５歳で学校に行っていれば高１だからだ。
そして禍姫は少女に災招君は羽月となる。
この２人が志倉家から抜け他組織に加わると大きな脅威となる。
だから、他組織と関わる機会をほとんど奪われたのだ。
いくら何でも何の伝（つて）手もなしに志倉家から抜けることはできない。
そこまで甘くはない。
もっとも、羽月は関わっていたようだが。
「楔（くさび）はオ姫サマか」
ぼそっと、少年は呟く。
「な、何？」
とことん少女の問いに答える気はないらしく、少年に無視されていく。
「じゃ、ウチの組織の病院に連れてってあげるよ。タダでね」
ここで恩を売っておけば自分の所属する組織の組織員、そこまではいかなくとも協力員くらいにはなってもらえるかもしれないと、

少年は思い言った。
「本当？」
タダより高いものはない。裏があるな、と少女は思いつつ訊いた。
「本当。来る？」
「来る」
今は手段を選んではいられない。裏があることを承知で少女はうなずいた。

○　○

「ねぇ、オ姫サマ。もう寝たら？羽月の異常な体力のお蔭で手術は成功したんだから。起きてる必要ないと思うよ」
あれから、ヘリに乗って病院にやってきていた。（なんと邸の庭にはヘリポートがあったのだ。少女もこの庭にはなんかあるな、と思っていたがヘリポートがあるとは思いもしなかった。）
そして羽月の手術が成功したことがついさっき分かり、やっと一息ついたところだった。
時計は既に夜中の２時だということを伝えている。
「羽月が起きるまで起きてようと思って」
「いくら羽月君でもそんなにすぐは起きないわよ。多分あなたがこれから寝て起きてもまだ起きてるかどうか怪しいものっていう状況よ。寝ときなさい」
いつの間にか近くにきていた２０代前半ぐらいの女性が言った。
「あなたは？」
少女が尋ねると少年とは違ってきちんと答えてくれた。
「あたしは美谷朝香（みたにあさか）。ナツの同僚ってとこね」
「ナツ？」
「あれ、知らなかった？こいつのことなんだけど」
女性―朝香は少年―ナツを指さしていった。
「本当の名前は違うんだけどそっちで呼ぶと怒るから、ナツって

呼んでやって」
「おい、朝香。人に指さすなよ。大体お前なんでここにいる？」
不機嫌そうにナツは言った。
「あんたが珍しく拾い物したっていうから、ちょっと見物にきたのよ。それにあんたったたら女の子相手に自己紹介もしなかったの？」
「うるさいな。訊かれなかったんだよ」
「訊いた。あたし訊いたよ。あっさり無視されたけど」
すかさず少女は口を挟む。
「そうだったか？でも人に尋ねるときはまず自分からだよな。アテッ！痛ッ！何すんだよ朝香！！」
屁理屈で自分の非を認めようとしないナツに朝香の制裁が下った。
「バカ！ナツこの子の名前さえ知らないの？！」
「羽月がお前に教えたら穢れるとか失礼なこと言って、教えてくんなかったんだよ！それに実際、禍姫の実名なんて志倉家のトップシークレットだろ。災招君の実名だけでも知ってるオレたちのが異常なんだよ」
「あたしは知ってるわよ」
「なっ、どっ？！」
心底驚いたという顔をしてナツは言った。
「やっぱり日頃の行いの違いかしらね、夏鈴（かすず）ちゃん」
「あー。そうかもしれませんね、朝香さん」
少女—夏鈴はスパッとそう言った。
「別に敬語とか使わなくていいのよ。それに名前も呼び捨てで全然構わないし」
「そーだ、そーだ！朝香なんか呼び捨てで充分だ！！！」
除（の）け者にされていたナツが騒ぐ。
「あ、そういえばナツってどうして家にいたの？」
「無視かよ。たくっ、仕事だよ。シ・ゴ・ト」
叫んだことを無視されていじけたように言った。

「仕事って何よ？」
「羽月に共同でする仕事があるからやれって言いに行くのが仕事。こんなの下っ端に行かせればいいのにね。重要だから下っ端には任せられないとかって言われて行くはめになっちゃってさ」
「ふーん」
「ま、ナツ1人には任せられない仕事だから信用のおける助っ人を自分で調達して来いってことね。助っ人は羽月君に決まってたけど」
「うるさい」
朝香が口を挟むとすぐにナツが言い返した。
「仕事ってことはどこかの組織の組織員なの？」
「そうよ。あたし達ＢＬＡＣＫ・ＧＯＡＴの組織員なの。その中でも武力を行使してことを進めたり、高度な戦闘能力が要求される任務なんかをこなしてるの」
ＢＬＡＣＫ・ＧＯＡＴとは最近裏世界で勢力を伸ばしている犯罪組織だ。
もちろん夏鈴も知っている。
「よく羽月が一緒に仕事してるって言ってたとこだ」
「うん、そうね。ウチは羽月君のお得意様になってるわね」
「でもなんで羽月ばっかりであたしにはまわってこなかったんだろ、ＢＬＡＣＫ・ＧＯＡＴの仕事。いつも1人だけでする仕事でつまんなかったんだよね」
「ウチはウチの組織員と共同でしか仕事を依頼しないからだろ。頑張って他の組織と関わらせ無いようにしたのに、共同の仕事なんかオ姫サマにまわしたら台無しだからな」
「オ姫サマって呼ばないで。ねぇ、それってあたしが他の組織にとられたりしないように、逃げたりしないようにってことでやってる予防策なんでしょ？」
「そうだと思うけど。後、さっきはそう呼んでも何も言わなかったのに今更なんだよ。」

「あの時は余裕が無かっただけ。じゃ、何で羽月だけＯＫなの？羽月のほうがあたしより強いし、一族のやり方にも反感持っててそれ隠さなかったのに」
むしろ羽月のほうがその予防策をしたほうがいいはずなのにおかしい、と夏鈴は思って訊く。
「弱味でも握ってて、その必要が無かったんだろ。分かったよ、全く」
ナツはそう返す。
「よ、弱味ってなによ？」
「さぁな、知るか。それに弱味を握られてたってのも推測だからな」
朝香がナツを睨んでいたことに夏鈴は気付かない。
「もうそろそろ寝たら？夏鈴ちゃん。３時過ぎてるわよ。仮眠室使ってもいいって看護婦さん言ってたから」
朝香が何気ない振りをして言う。
「あ、じゃあ、もう寝るね。おやすみなさい」
そう言うと夏鈴は仮眠室のほうに歩いて行った。
「バカ。あの子は頭良いんだから、余計なことばっかり言ってたら気付かれるわよ」
朝香はしかめっ面をして言った。
「まぁーな」
「弱味は夏鈴ちゃんだっていうこと。そんなことになったら羽月君に殺されちゃうわよ」
「縁起でもないこと言うな。でもアイツがどう弱味になるんだ？守ってやらないといけないようなヤワな女には見えないぞ」
「色々あるんでしょ。あー、ねむ。もう寝ましょ」
「そうだな」
そして２人も仮眠室へと歩き出した。

○　○

夏鈴は仮眠室のベッドで丸くなっていた。
今日（といってももうほとんどが昨日だが）は、色々なことがありすぎて頭の中が混乱していた。
それに、と思う。
確かに羽月の手術は成功した。
が、前と同じように動ける、と聞いたわけではない。
やっぱり、夏鈴は不安だった。
だからその不安を無くそうとして目を閉じた。
深く深く眠れるように。
終焉を迎えてしまった、異常だったけれど確かにあった日常のことなど、忘れてしまえるように。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2512e/

願いと約束

2011年1月13日03時03分発行